

正宗白鳥

文學  
雜感



文  
学  
杂  
感



月々の雑誌の小説は概して読みづらい。日本の現代の言葉で書かれていながら、どうしてこう読みづらいのかと疑われるくらいである。どうせ多分の忍耐力を必要とするのなら、頭を痛めても、或は辞書をひく面倒さがあるとしても、外国の小説を読んだ方が、遙かに読み甲斐があるように思われる。日本は、山水明媚の国である。食物もうまい。国民は愛国心に富み、戦争も強い。頭腦の力も外国人に劣っているらしくはない。しかし、少くも日

本の小説は概して面白くない。これは、私が何十年來実験し來ったことで、動かし難い信念となつてゐる。無論日本にも傑れた小説もないことはない。この頃の雑誌小説だつて、それぞれの面白味を有つてゐる、文芸時評の題目にならんこともないが、西洋に比べると太陽の前の行燈の光のような気がする。行燈の光も雅致があるが、今の時世では甚だ手頼りないものである。

文学芸術の方面に於ても、西洋崇拜は望ましいことではないが、明治以來の舶來崇拜の傾向は、今なお識者の心にも根づよく潜んでゐるのである。チャプリンが來遊

すると、映画関係者は云うまでもなく、首相でも市長でも熱誠をもって歓迎し優遇する計画が立てられているそうだ（この雑誌が発行された時にはそれが実現されているだろう）日本の映画俳優で首相から礼を厚うして晩餐に招待されたものがあるであろうか。自国を卑しみ他国を尊ぶのは悪風であるが、チャプリンやダグラスが多数の映画愛好者に優遇されるのは当然のようにも思われる。

「改造」には、ムツソリニの「ナポレオンと議会」という長い戯曲が出て、五月の雑誌の創作欄で巾を利かせて

いる。佛蘭西で脚色されたもので、ムツソリニの原体はどれだけ保存されているのか分らないが、私は退屈しないで通読した。訳文は巧妙とは云われぬが、登場人物は印象鮮明であり、事件の運びも要を得ている。ムツソリニが自分の気持をナポレオンに托して現わしているように思われて面白い。「大臣にしたり元帥にしたり、王にしたりして朕の寵遇した者達は、もう三度も朕に逆いた。彼等の念頭には自己の安逸と蓄財しかない。そうして訳もなく戦鬪を厭悪する。朕のために尽してくれるものは、朕の気の毒な兵士等だけだ」とナポレオンは云つ



ている。また、「平和平和、……人民達はいつでも二つの欲望を有している。戦争を為さない、税金を払わない。それだ」とも云っている。陰険な政治家フーシェは、「お前はまだ近代人の気持の上に幻影を夢見ているな。……今までおれは、人間の悪辣さや下卑た根性を利用して来たが、未だ嘗て失敗したことはない。……勿論大多数は正直なものさ。……だからこそ、正直らしく振舞えば、こうして容易に権力を握ることも出来ると云うものだ」と云っている。ムツソリニは心の中にこういう考えをもって世に処しているように思われる。彼れはよく人

間を知っているのだ。議会に対する彼れの考えも、この一篇のうちによく現われている。無論、通俗ナポレオン史と云ったようなもので、この英雄についての新しい歴史的研究があるのではないが、有振れたものでも、作者はよく利用して、適切な場面を作り出している。日本にも英雄劇は盛んに創作されているが、この「ナポレオン」劇ほどにも屈曲性を有っているものは少い。

高濱虚子氏の俳句雑誌「ホトトギス」は、寄附されているので何気なく披いて見ていたが、巻頭の虚子氏の小

品には、いつとなしに興味を覚えるようになって、この頃は毎号必ず読むことにしている。どれも面白い。在来の写生文のようなものだが、文体も趣向も、その時々異っていて、僅か二三ページの間に、世態人情が穩かに漂っている。同氏の昔の写生文には、わざとらしい所があり、銜気もあつたが、この頃のは、平々淡々とした味いがあり、大小高下の批判は別として、本当の芸術品と云った感じがする。近来氏は俳句を専門として、以前のようにな小説家として文壇の競争場裡に現われないために、却つて、心そのままに筆が執れるのかも知れない。

「改造」所載の、新作家阪中正夫氏の戯曲「馬」は、関西の田舎の百姓言葉をそのままに使っているため、読みづらいこと甚だしい。これ等の田舎言葉は私の郷里の言葉に似通っているが、それでさえ読みながら不愉快な感じがした。田舎の事件を写すのに田舎言葉を使用するのは当然であるが、こんなに読みづらく、不愉快な思いをさせないですむように工夫は出来ないものであろうか。しかし、我慢して読むと、他の多くの年少作家とは異つた「何」かを有っているようである。田舎の事というと

「地主の搾取」なんかを問題にして型の如き気燄を吐く小説や戯曲が多いが、阪中氏の作品は、そんな鈍才的作品とはちがって、老いたる農夫が人間以上に馬を可愛がる気持が、ユーモラスに出ているとぼけた面白味がある。元来真面目くさった作品は案外書易いもので、こういう、とぼけたものは書きにくいのである。父親が家事を棄てて、極端に馬の愛に溺れることから、長男を怒らせ、二人が鎌や荷い棒を持って喧嘩をするところなんか、舞台に上せて面白いだろう。長男が放火したため気が転倒して、前科者の弟に愚弄されるところなんか、褒めて云

うと、モリエールの喜劇の味いがあると云つてよかろう。  
……だが、この作者は要するに薄っぺらな滑稽味だけを  
現わすのを特色とするに止まるのかも知れない。この一  
つだけでは、この作者の前途に望みをかけていいか悪い  
か、見当がつかない。

「中央公論」の岸田國士氏の戯曲「顔」は、巧みに仕組  
まれてはいるが、私はその妙味が分らない。上演したら  
味いが出そうには思われる。

私は、才を抱いて犬死した梶井基次郎氏の小説では、

「のんきな患者」を読んだだけである。新進作家中最も評判のいい嘉村礒多氏の小説では「途上」を読んだだけである。どちらにも文壇で推讃されるほどには感心しなかったが、しかし、この二つの小説によって推察される二人の作家の態度には、人間の本性に触れているところがあるのである。私自身の心を顧みることが出来る。梶井氏は、重患に悩まされながら、いろいろな恐怖を忘れようとして、わざと「のんきな患者」らしく装い、自からおのれを晦まし、他人の目にも呑気らしく見られたがっていたことが、私には想像される。病気についてののみ

ではなく、人生の事多くはそうしたものである。人間は  
真実をのみ見詰めるには堪えられないのだ。また真実の  
自己の姿を他人に見られたくない感じも強いのだ。……  
嘉村氏は、病める梶井氏に反して、自己をよく見詰めよ  
うとし、自己の真の姿を曝露しようとして努力した。この曝  
露慾と隠蔽慾とが相錯綜して、人間と世間のいろいろな  
事件が出来上り、いろいろな悲劇喜劇が生ずるのである。  
曝露慾の発揮がいつも深刻であるとは云えないとともに  
に、隠蔽慾の発揮をいつも浅薄であるとは云えないので  
ある。



私などは、近來ますます隠蔽慾の発作を感じることがある。自己を現わすよりも隠すことに内心の要求の強いことがある。

「築地座」の第三回公演を見て、感ずるところが少くなかった。新劇らしい新劇を見たのは久振りなので懐しみを覚えたが、見てしまうと、印象の薄い手頼りない感じのするのを如何ともし難かった。友田恭助君などの新劇修業は、すでに十年にも達しているのだから、舞台技術に於て自得しているところがある筈である。演劇愛好者

にも真価を認められていい筈であるのに、今なお新劇の存在の不確実で、朦朧としているのは、気の毒である。文芸協会自由劇場以来、新劇の俳優を志ざした人々ほど、時と力を無駄に費ったものはないようにさえ思われる。一時の物好きや遊戯的の気持で異った芝居の真似をした人は別として、友田君などのように、それを一生の事業である如く、熱心に新劇を演じ続けて来た人が、何物をも得ていないらしいのを気の毒に思う。これは適当な脚本が得られないためであるか。演出者が指導をあやまつているためであるか。演劇というものが、他の芸術他の

事業よりも困難であるためなのか。恐らくは、そのすべてが事実であろう。

しかし、今度のこの座の所演は、多少の興味のないことはなかった。第一回以来の上演目録を見ても、この座の方針は少くも俗悪でないらしく、当て気もないらしいのが気持がよかった。飛行館の狭い会場で、演技者と観客とが静に芸術を楽しんでいるらしく見えたのが快かった。岸田氏の新作は世間の大劇場でたびたび観ているが、本当はこういう劇団で上演すべきものであるろう。しかし、今度の「ママ先生とその夫」は、演出振りが他所行きの

ようであり、他人行儀のようであり、二三の主要人物がそれぞれに自分を無遠慮に現わすところがなかったのを、私は遺憾に思った。

兎に角、こういう劇団が持続され、相当の成績を挙げ、ることを、私は蔭ながら切望している。見るに足る芝居が欠乏していることを、私は不断淋しく思っている。

徳田秋聲氏を中心とした「秋聲会」というものが創立され「あらくれ」とか題する小雑誌が発刊されるそうだが、世間の雑誌が商業主義に墮しきった今日、文学愛好

者が何の束縛もなく、自己の心のままに筆を執り得られる箇人雑誌、或いは同趣味者共同の雑誌の現われるのは快心なことである。相馬御風氏の「野を歩む者」は創刊後何年か維持されているが、この雑誌の面白味は、北陸の郷土色の現われていることと、相馬氏一人で全部を執筆していることである。他人からお義理の片々たる原稿を貰って誌面を埋めたのでは、箇人雑誌の特色がないと云っている。相馬氏が他の力を借らないのを私はいつも気持よく思っている。しかし、その結果単調になり、執筆者自身も疲労するかも知れないが、そうしたら廃刊し

たらしいではないか。営利を外にした箇人雑誌の価値は箇人を発揮するところにあるので、寄せ集め原稿で強いて雑誌を出すのは無意味である。

早稲田の演劇向上会から「芸術殿」という雑誌が出ているが、この雑誌では、坪内博士が毎号、自由に作品や感想を発表されるのが面白いのだ。私は、博士の文学や演劇に関する回顧録を書かれるのを望んでいる。博士の如く、明治文学の開拓者であって、今日までいろいろな方面で活動された文学者の回顧録は、生きた明治大正の文学史であり、演劇史であると云っていい。明治文学の

若き研究者などは、逍遙露伴両先生などから、今のうちに、いろいろな史料を聞いて置くがいい。

既成作家の箇人雑誌や、同好者の共同雑誌の出るのは、結構なことだが、こういうものは、大して売れる筈はないので生活に余裕のある人が企てなければ持続される見込は乏しい。若し、商業主義の雑誌の方へ身の入ったものを書き、自分や自分達の雑誌へは、それが原稿料にならないため、申訳だけの者を書くようだったら、甚だ詰らないと思う。

政治的圧迫、経済的圧迫その他いろいろな圧迫のために、青年の意気の挙らざること甚だしい。文学についても、砂礫の如き理窟をこねている小説などには、私は潑漑たる青年の姿を認め難く、空想力の萎びた詩のない、早老の影を見るのである。明治以来「青春の書」と云つていいものは乏しかった。「青春の反逆」の強烈に現われた文学は稀れだった。樗牛の「多少の青春らしい反逆文字」は攻撃されていたが、彼れの反逆なんかも甚だ弱かった。シエークスピアよりもバイロンを好むと云っていたが、樗牛はバイロンの影法師にも当らなかつた。口



ほどにもなく常識的で、学究的で牙齒きばも爪もないバイロンであった。西洋近世の文学思想を大急行で模倣しつづけて来た新日本の文壇では、バイロンの名も一時盛んに筆にされ口にされたことがあったが、本当にバイロンの骨法を伝えた文人は一人もなかった。十九世紀初頭には、歐洲各国の青年文士が、バイロンに刺戟されて新生命を感得したのであったが、日本の文壇ではバイロンに感化された跟跡はないと云っていい。だが、バイロンの詩は永久に青春の詩である。「青年の反逆」を心行くまでに現わしている。その一生もその作品も痛快至極のもので

ある。彼れは神に反抗し、社会に反抗し、人に反抗し、生存その者にも反抗した。そして、その気持を蔽うところなくつけつけと唄った。虚偽の世の中お体裁の世の中に、バイロンを読むと、いつでも溜飲が下るような気がするのだ。「カイン」という劇詩のなかで、バイロン自身の化身であるカインが、天使に向って、「おれはおれとして生きている人間だ。おれは自分から求めて生れたのじゃない。おれは自分で自分をこの世へ作り出したのじゃない」と公言している。聖書のなかのカインは、弟を殺したために神に罰せられ、地上を流浪しなければな

らなかつた。バイロンも世上の常識道徳に逆らつたために、生国英吉利にいられなくなり、異郷を流浪することとなつた。しかし、バイロンは、「おれには責任はない。おれはこの通りの人間で、こうする外はなかつたのだ」と云つて、神に反抗し何の悔ゆるところもなかつた。

バイロンが離婚事件や、異腹の姉との秘密の関係などによつて、猛烈な非難を受け、新聞や社交界で侮蔑され、会合の席に彼れの姿が現われると、来会者が席を退くほどであつたが、しかし、バイロン自身は世間から爪はじきされればされるほど元気が強くなつて、足下で時代を

踏みにじる気になったのだ。彼れは社会的貝殻追放の刑に処せられて、自国を出て一生帰る期を得なかつたのだが、彼れは孤影悄然として船に乗つたのではなかつた。孤影傲然として出て行つたのだ。文学者は由来「孤影悄然」趣味なので、日本ではことにそうである。

バイロンは、スイスや伊大利を放浪しながら、「マンフレッド」や「カイン」や「ドンジヤン」などを書いて、遺憾なく自分の反逆的心境を吐露した。青春の詩は感傷的で涙脆い詠歎になり勝ちなのであるが、バイロンは飽くまでも男性的であつた。ヒロイックであつた。「神は

自分で創造した人類の苦しむのを喜んで見ている」という宇宙観の上に立つてのヒロイズムが、彼れの特長なので、浅薄な楽天的豪傑主義ではなかった。

青春の反逆も年を取ると衰えて、妥協的になり姑息になり徒らに生命をぬすむようになるのだが、バイロンは青春の尽く頃には、自分から進んで死を招いた。青春の気の抜けた、人間の出し殻になって生きていられないのが、バイロンのバイロンたる所以であった。

彼れと従者とが、ギリシア行の船に乗った時に、船長は従者に向って、「君の御主人は何だつて、あんな荒れ

果てた野蛮な土地へ行くのだ？ あすこにあるものは、岩と泥棒ばかりだ。泥棒が岩の穴に住んでいて狐のように飛出して来るのだ。鉄砲やピストルやナイフを持って「と云うと、従者は、「ギリシアは蠅と蚤と虱の国だ。旦那は何のためにそんな所へ行くのか。おれには分らん。旦那一人が知ってるだけさ」と答えた。それを立聞きしたバイロンは、「豚のような目でおれの心の中が分るか」と叫んだ。バイロンやボードレエルの幽鬱な心は、凡人には計り難いように思われる。我々は「カイン」でも「悪の華」でも、薰風の流るる書齋で愛誦して、深い思想を

会得したような遊戯感に耽っていられるが、作者自身の心境は、そんな生やさしいものではなかったにちがいない。バイロンが戦場で病気で倒れた時、彼れは医者に向って、「君は僕が命を惜んでいると思っっているのか。僕は心の底から人生が嫌いになっている。この世に別れる時を歓迎している。なぜ僕が人生に執着する？ 何かの歓楽があるというのか。僕は人間の味わういろんな種類の歓楽を味わって来た訳だ。旅行もした。好奇心の満足もさせた。それであらゆることに幻滅を知った」と云っている。彼れは自分の生存に対しても反逆する境地に達

したのである。

私は、さき頃、坪内博士の新戯曲「阿難の累い」を読んで、若き阿難の悟りに共鳴し得られずして、むしろ、「カイン」などに現われたるバイロンの疑惑や反抗に心打たるる思いをした。「阿難の累い」中の少女の心機一転についても、大抵の現実の若い女子が、病老死の仮面なんかに脅されたくらいで、浮世の無常を痛感はしないだろうと想像した。

田山花袋氏逝去後、早くも満二年が経過した。氏に対



する迫憶は、文壇の上では甚だ稀薄で、氏の全盛時を知っている私などには、浮世の変遷の烈しさが思浮べられる。一時は田山花袋中心時代もあったので、しかも、その時代が明治以後の文壇史中最も賑やかな時代であったのだ。毀誉褒貶を花袋氏は一身に集めていた感があった。

あの勢いのよかった花袋氏の事業も今日から見ると、その場きりの安っぽいものであったのであろうか。チャチな思想であり、インチキな文学であったのであろうか。私は氏の評論や作品を、今日の日で読直して見たいと思っっている。花袋氏自身云ったことがある。「本当のいい

文学は一度世に棄てられて、あとで復活するものだ」と。バイロンがそうであったが、花袋氏はどうであろうか。花袋とか泡鳴とかいう人は、志賀直哉とか永井荷風とかいった風の、純粹の芸術を製作する文学者ではなかった。作品には蕪雜なところが多かった。しかし、瓦礫の中に珠玉を含んでいたかも知れない。キチンと取澄ましていないところに却って面白味があるかも知れない。少くも今日の文壇から馬鹿にされるほどのものではあるまいと、私は思っている。

私はこの頃、割合に映画をよく観る。この頃の芝居見物ほどには退屈もしないし、表現のうまさに感心することもするが、しかし、映画というものは、何処まで行っても、芸術として皮相なものではないかと思われて為方がない。近代にはじめて起った芸術として、その前途にどれほどの発展をするか計り難いが、今までのものでは、「芸術の極致」をそこに見たように感じたことは一度もない。名画音楽、傑れた小説や戯曲によって動かされたような意味で心を動かされたことは一度もないと云っていい。



日本文学電子図書館

---

文学雑感

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第7巻、新潮社

昭和42年5月30日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館